

# “The Porter” と プルマン・ポーター労働運動\*

本 庄 忠 大

## 1. はじめに

「ポーター」(“The Porter”)において父親とともに列車で旅をしているジミー・クレイン (Jimmy Crane) は、車窓に流れる風景をミシガンの風景と比較しながらその違いを意識している。しかし「黒人」ポーターとの出会いの後で天候が雨へと変わるとともに、彼の風景の捉え方もまた変化している<sup>1</sup>。ジミーは雨上がりの田園風景をケンウッド夫人 (Mrs. Kenwood) の家にあった本の挿絵のような美しさだと独白し、紅葉した木々の枝を通して時々見える川の風景を巡って、そこで生活し、釣りをし、昼食を取り、列車が通り過ぎていくのを眺める場所のようだと魅力的に感じている。ところがそのすぐ後に、風景の大部分を彫版画に例えて、陰鬱で非現実的で古典的な側面をも見出している (577-78)。つまりジミーは車窓に流れる風景に心惹かれる美しさを見てとる一方で、その風景に馴染めない孤独感や疎外感に苛まれているのだ。風景がジミーにもたらす二面的な印象は、風と雨のそれぞれによって木の葉が落ちた後の光景を対照的に捉える彼自身にも見受けられる (578)。

このように彼の心象の推移をもたらしたと考えられるポーターとは、1867年にジョージ・プルマン (George Pullman) が設立したプルマン社が運行

---

\* 本稿は2015年5月9日に開催された日本アメリカ文学会北海道支部第175回研究談話会 (於札幌市立大学サテライト・キャンパス)、及び同年5月23日に開催された日本ヘミングウェイ協会2015年5月ワークショップ (於立正大学品川キャンパス) において口頭発表した原稿に加筆・修正を施したものである。

する寝台車業務に従事していたプルマン・ポーターを指している。「黒人」が『人に仕える素養』があるというステレオタイプ」(藤永 プルマン 122)に基づいて、彼らを優先的に雇用していたプルマン社は、忠実で、従順で、子どもっぽく、仕事に満足しているポーターの姿を打ち出そうとしていた(Santino 115)。またスナップ写真では幼い子どもを預かった際の暖かく穏やかな心で、まさに愛情深い姿を映し出している(Santino 116)ほか、プルマン社の絵は、ポーターが単に自らの職務をきちんと遂行するというよりも、上位に立つ者を喜ばせようと切望する劣位に立つ者としての性質を伝えている(Santino 117)。しかも数多くの本や映画などにおいても、ポーターは従順な使用人といったイメージとともに登場していた(Tye 177-79)。

このような19世紀後半から20世紀にかけてのステレオタイプのポーター表象の傾向を踏まえるならば、アーネスト・ヘミングウェイ(Ernest Hemingway, 1899-1961)の作品「ポーター」は、かなり正確に彼らの実態を反映していることがわかる。マーク・ケヴィン・ダドレー(Marc Kevin Dudley)も指摘するように、ヘミングウェイはポーターたちの実情に精通していたと推測できる(178)が、物語では当時のプルマン社執行部が読めば驚愕したに違いない側面さえ描き出されてもいる。そこで本論では、プルマン・ポーター労働運動を中心とした歴史的文脈を踏まえながら作品分析を行うことによって、作者ヘミングウェイの創作意図を究明したい。そしてこのような作業を通して浮き彫りにされる物語結末部におけるジミーの心象風景に隠された意味を探究したい。

## 2. プルマン・ポーター労働運動を巡る歴史的背景

「ポーター」を含む『新しく殺された騎士』(*A New Slain Knight*)が執筆された時期にあたる1927年当時、ポーターはプルマン社事業における人種隔離制度、つまり機関士や整備士、車掌は白人が独占し、「黒人」は乗客へのサービス労働のみを担当するという制度のもとで、過酷な業務に従事していた。就寝準備をする際に、ジミーと父親クレイン(Crane)は通路に靴を出すのが、これは自ら購入した高品質の磨き粉で夜間に乗客の靴を磨く(Arnesen 16)というポーターの仕事のひとつを彷彿とさせる。また彼らは通常、喫煙室で仮眠を取っていた。この喫煙室は夜間も乗客がトイ

レや痰つばを使用するのに出入りしたり、葉巻やたばこに火をつけるために立ち寄りたり、カードゲームに興じるほか、明け方まで語り続ける場所でもあったため、ポーターが休憩時間を確保することは容易ではなかった (Tye 41)。しかも彼らは、物語に登場するポーターが姿勢を起こしたままで眠っているように、乗客からの呼び出しに備えて待機しながら、上体を起こした姿勢で眠らなければならなかった (Arnesen 21)。一方で、物語において早朝の食堂車で「黒人」従業員4人がカードゲームに興じている様子は、ダドレーが触れているような「衝動と悪習に駆られた野獣のような黒人」(99)ではなく、当時実際に見られた「黒人」乗務員たちの休憩中の姿であり (Tye 58-59)、ポーターがジミーに伝えるこの仕事特有の苦悩、つまり「結婚すれば妻が浮気する。鉄道稼業に就いていれば、幾夜も家を空けなくてはならないから」(577)は、列車で働き始めたばかりの料理人が家に戻ると、妻の不貞行為の現場を目撃したという実話 (Tye 85)とも一致する。このように物語は当時の「黒人」鉄道労働者の実情をかなり正確に反映している。

またポーターの業務は、1926年の月平均労働時間が343時間であり (Tye 86)、同年に労働局が調査を行った数百人のポーターの収入は、給与とチップから必要経費となる制服代やホテル代を差し引くと、労働統計局が5人家族で必要であると算定した最低金額よりも1,230ドルから298ドル少ない状況だった (Tye 91) など、幾多の劣悪な条件を伴うものだった。しかし数多くの「黒人」たちは同じ仕事にとどまり続けたという。物語においてポーターが「鉄道業の景気はどうだ」と尋ねた際に、料理長が「鉄道は堅調だ」(574)と答えているように、鉄道業は比較的安定した職業だったからである (Arnesen 23)。とはいえ、彼らを取り巻く労働環境に対する不満流出の例は、1890年にはすでに見られた (Tye 99)。その後1910年代には「黒人」労働者たちによる小規模の抗議行動が幅広く展開されるようになり (Arnesen 50)、20年以降は彼ら独自の組合結成の動きが活発化していった。

ところで、20年代に入っても続いていた南部農村やカリブ海域から北部諸都市への「黒人」の大移住は、北部において「黒人」恐怖症を煽った一方で、「黒人」による新たな自己主張を反映したニュー・ニグロ運動を進展させ、ネイティヴィズムが「黒人」恐怖症へと読み替えられる傾向を強め

ている (Guterl 131)。このニュー・ニグロ運動は、多様な労働団体を含む「黒人」による抗議組織の劇的な広がりにもつながっている (Arnesen 57)。たとえば、A. フィリップ・ランドルフ (A. Philip Randolph) は1925年にアメリカ最初の「黒人」労働組合である「寝台車ポーター友愛組合」(BSCP)を結成し、ポーターたちの人種意識に訴えかける運動を展開している。彼は「黒人」民族主義指導者マーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey) らとともに自らをニュー・ニグロと称して、W.E.B. デュボイス (W.E.B. Du Bois) といった旧来の「黒人」指導者批判を繰り広げた。またランドルフとガーヴェイの運動思想に共通する点は、「黒人」による意思決定を重視することであり、BSCPとはポーターという「人種隔離された職業を基盤にしつつも、職業が持つステレオタイプに果敢に挑み、黒人ポーターの連帯の場をつくり出そうとする」(藤永 黒人) 団体だったのである。

その一方で、当時最も反労働運動的だった企業のひとつであるプルマン社は、積極的に運動に参加したポーターを解雇するなどの厳罰で臨み、代わりにフィリピン人などを採用したという (Tye 139)。しかも規則違反を行うポーターを発見するための特別調査官を乗車させ、違反したポーターはその重大さに応じてボーナスの不支給や停職、解雇などの処分対象となった (Tye 103)。やがてBSCPによる労働運動は低迷化していく。その傾向に変化が現れたのは、1934年の鉄道労働法改正により仲裁の強制権限をもつ全国調停委員会が設置されてからであり (藤永 プルマン 141)、ランドルフが率いた組合が労働争議に勝利したのはその翌年の1935年のことだった。

ヘミングウェイが「ポーター」を執筆していた当時、まだポーターたちが労使交渉を行う組合組織が存在しておらず、労働環境を巡る彼らの不満がいっそう集積しつつあった時期に相当する。そのためニュー・ニグロ運動の進展に伴って主体性や独自性を体現した鉄道サービス労働者たちは、「人種関係が色濃く影を落とす労働の現場で、秘かな抵抗と防御策を日常的に講じていた」(藤永 プルマン 131)。つまり彼らはプルマン社のみならず、白人主流社会が描くステレオタイプのポーター像とは異なり、日々の営為において白人との関係性に変化をもたらそうと試みていたのである。このような当時の「黒人」鉄道労働者たちの間で芽生えていた新たな人種意識も「ポーター」においては描き出されている。

### 3. ポーターと料理長の奇妙な会話

物語においてポーターと料理長は非常に親しい間柄にあり、二人の共通した基盤のもとに会話が成り立っているため、彼らのやりとりは簡潔である。作品に見られる会話に着目するとき思い出されるのは、ヘミングウェイは会話体が持つ現実性を重要視した作家だということである。しかも彼はその会話体が日常的に使われる口語表現と同じように、自然な響きを持つものかどうかにかかなりの注意を払っていた。そして作品を書き上げると彼はよく妻や知人に読ませては、会話の部分に不自然な点がないかどうかを確かめていた（今村 192-93）。しかしポーターと料理長の間で用いられる言葉遣いは、作品執筆当時の多くの白人読者であれば不自然だと感じたことであろう。というのも、そこにはまさにポーターたちが「職業が持つステレオタイプに果敢に挑み、黒人ポーターの連帯の場をつくり出そうと」していた側面が浮き彫りにされているからである。

そもそも当時の白人乗客たちは、ポーターの制服を着る者を“George”と呼ぶことが多かった（Tye 2）。そして「ポーターのジョージ」とは、「パターナリスティックな『主人』の保護の下で働く『従順な下僕』」であり、「白人が脅威を感じることはない黒人、自らのファンタジーを投影した他者性の象徴」（藤永 プルマン 124）だった。またこの言葉は「白人がポーター各個人の人格を認めないことを意味すると同時に、彼らのステレオタイプに基づいた盲従的な行動に対する期待を示すものだった」（Arnesen 18）。そのためポーターやウェ이터の大部分は、“George”という語を聞くとたじろいだという。しかもそのような呼びかけに応答しないと解雇の理由となり、その一方で応答するとそれは彼らが自身の名前や個人のアイデンティティを持たないことを認めることになった（Tye 95）。ポーターに対する呼称としての“George”は、1926年以降にプルマン社が各車両にポーターの名前入りカードを掲示することで根絶しようとした後でさえも使われ続けた（Tye 96）ほか、“Uncle”もまた軽蔑語であり、特に高齢の乗客たちによって使用されていた（Tye 94）。

当時の歴史的背景を踏まえるならば、物語に登場する料理長がポーターに対して呼びかける語“Uncle George”（573）は、白人乗客の模倣であり、既存の体制（人種上の優劣の関係）を嘲弄する彼の姿勢を反映するものと判

断できる。この後彼は白人乗客と「黒人」鉄道従業員の役割演技を交換するかのよう、ポーターに対して“sir”を使用している(573)。ポーターも料理長に対して使用するこの語は、もちろん白人乗客に対する敬称であるが、この場面ではあえて「黒人」間のみで使用されている。さらに料理長はジミーとポーターの二人を“gentlemen”と呼んでいる(574)。このようにポーターや料理長が使用する語“sir”や“gentlemen”も、“Uncle George”と同様に、人種間関係に基づいた呼びかけをあえて行わないという彼らの意向を示しているように思える。彼らの会話の背後には、当時の慣習に倣って白人読者の多くが共有できる現実性を持たせるのではなく、人種上の序列関係は「黒人」による白人から期待された役割演技の遂行によって維持されているがゆえに不安定であると見抜いていた作者ヘミングウェイの意識と創作意図が垣間見えるだろう。

一方で、前夜の食事について料理長から質問されたポーターは「あの黄色い連中と一緒に」、さらには「今では、白いエスキモーって呼んでいるよ」(573)と答えている。このようなポーターの応答は、「なんでもお似合いの呼び名があるな」(573)と述べる料理長のセリフとも相俟って、最終的には肌の色による優劣の関係が存在するという既存の体制を強化または再構築することにつながっている。

とはいえ、彼らの間で用いられる呼びかけの語は、確固たるものとして想定されていたカラー・ラインに揺さぶりをかけるかのように、そのニュアンスを巧妙に変えながら使用されている。食堂車を離れた後、ジミーが「おじさんと料理長はいつもあんな風に話すの」と尋ねると、ポーターは理由がどうであれ、気持ちが高揚したときだけの話し方であることと、料理長とは意気投合している仲であることを伝えている(574-75)。まさに「黒人」同士の気の合う仲で、特定の状況においてのみ交わされる会話のスタイルであり、白人少年ジミーがはっきり認識できる不自然さが醸し出される会話である点は見逃せない特徴だろう。言葉遣いと人種上の優劣の関係が密接に関連していた当時のプルマン車両内における慣習に対して、ポーターたちの間で醸成されつつあった抵抗意識を浮き彫りにするかのよう、作者による意図的な操作が行われているのである。このようなポーターたちの日常的営為には潜む密かな抵抗の様子は、彼らの会話のやり取りのみに見られるものではない。ヘミングウェイはあたかも当時の「黒人」鉄道従

業員たちの精神的内面を如実に描き出そうと試みるかのように、プルマン社の規則に対する不服従という明確な意志とともに行動するポーターの姿もまた前景化しているからである。

#### 4. 不服従という明確な意図とその限界

プルマン社の規則集によると、「凶器を身に付けたり車両で運ぶこと、(食堂車で使用する供給品とは別に) アルコールやビール瓶を販売用や他の目的で持ち込むこと、また勤務時間中の喫煙、飲酒、カードゲームを禁止する」(Pullman 102) と明記されている。しかし物語では、ポーターがジミーに「一緒に2, 3杯いただいた」、さらには「すっかり酔っぱらってしまった」(573) とも伝えているように、彼は白人乗客であるクレインとともに洗面室で飲酒していることがわかる。しかも彼は早朝の食堂車においてジミーの目の前で、彼の父親からプレゼントされた1パイント瓶を取り出し、料理長と一緒に飲んでいる(573)。このように白人乗客の面前で臆することなくプルマン社の規則を犯すポーターの姿に、自らの置かれた労働環境に対する不満に基づく抗議行動を見てとることも困難ではないだろう。しかもヘミングウェイはこのようなポーターの姿勢を読者により鮮明に提示するかのよう、彼に凶器となりうる剃刀の技を披露させてもいる。ポーターは表面的には白人乗客に従順な使用人でありながらも、その仮面の裏側では危険で破壊的な乗務員に変貌し得る存在でもあるのだ。

ところで、ダドレーは20世紀初頭のアメリカ社会に見られた「黒人」・白人間の不安定な人種関係というマクロな視点から「ポーター」を分析し、ポーターが示して見せた剃刀にジミーが脅威を感じる場面に必要な3つの点を読み取っている。まずポーターによる「剃刀は床屋の十八番というわけではない」(575) という断言が明示するように、物事が常に見た目通りだとは限らず、ジミーが示した恐怖反応は人種上の定義が崩れて白人による支配が及ばない瞬間を強調するものであること。2つ目に「黒人」と白人との関係は見せかけに基づく不明瞭なものであり、ポーターが社会秩序の崩壊を暗示させるのみで少年を動揺させたので、彼はすぐに何ら脅威を感じさせない役割を演じていること。そして最後に、秩序を維持させるものとは恐怖であり、その恐怖とは人種問題に起因する暴力や暴力的革命

に内在する人種上の大変動をもたらすもののひとつであるということである（106）。

ジミーが剃刀に対して恐怖を感じた後、ポーターが「すぐに何ら脅威を感じさせない役割を演じている」というダドレーの指摘は疑わしい。というのも、彼がその証左として挙げているポーターの言葉、「大の仲良しと一緒にいるのだから」（575）を聞いたジミーは、ポーターが酩酊状態にあると判断しているからである。むしろ彼が飲酒の形跡を消し去るべく多量の水を飲んだ後、話し方が他の人間と変わらず、口数も少なくなり非常に丁寧になる時点（577）において、再び安全であるかに見える乗務員を演じる姿に戻ったのだと考えるべきだろう。とはいえ、この点を除くダドレーの指摘は、ポーター労働運動の歴史的文脈において作品を検証した際にも、正鵠を射たものであることがわかる。当時の「黒人」ポーターによる白人から期待された役割演技の遂行如何によって人種間関係は大きく変化するからである。しかもダドレーが物語に読み取った恐怖は、「黒人」労働者に対して抑圧的なプルマン社に対して、反旗を翻そうと試みるポーターたちという雇用主・被雇用者間の不穏な状況に潜む恐怖とも有機的な関連性を見出すことができるからである。

その一方で物語は、人種を巡る安定した序列関係を維持させるかのようなポーターの発言を際立たせている。ポーターは剃刀の技を披露した後、ジミーに「剃刀なんて、ひとつの妄想だよ」（576）と伝えている。この言葉はもう一度繰り返されるほか、ポーターはジミーに対して実在した「黒人」ボクサーであるジャック・ジョンソン（Jack Johnson）と「黒人」指導者ガーヴェイが妄想を抱いたことが原因で投獄されたと述べている（576）<sup>2</sup>。つまり彼はこれら二人のニュー・ニグロを巡る歴史的な事実に触れながら、当時の白人主流社会が抱えていた「黒人」恐怖症を背景に、「黒人」の主体性や独自性、白人を凌駕する技能は、妄想、つまり根拠のないありえないこととして、圧倒的な権力の前に徹底して排除される実態を伝えているのである。それは彼が触れている「黒人」ボクサー、タイガー・フラワーズ（Tiger Flowers）が辿った経歴にもあてはまるだろう。

しかしこの場面で注目すべきは、ポーターが「剃刀という妄想を抱く自分の将来はどうなるだろうか」（576）と話している点である。ラリー・タイ（Larry Tye）はポーター労働運動に見る苦難の道のりが敗北主義の文

化を生み出し、トイレの汚れをこすり落とし、チップを喜んで受け取ることが卑屈なセルフイメージを創り出した(166)と指摘しているが、この場面には無力感に苛まれ、諦念を抱いた実在のポーターを想起させるかのように、最終的には既存の労働環境に回収されてしまう自らの立場をジョンソンやガーヴェイらの境遇と重ね合わせながら嘆き悲しむポーターの姿が描き出されているといえる。このように失意を露わにしたポーターがその後再び安全な乗務員を演じる姿には、現実に対する彼自身の悲壮感さえ見てとれることのできるだろう。

この物語において、アルコールに酔いしれたポーターがジミーに提示する剃刀は「人種的な意味合いを帯びた武器」(576)であるのみならず「妄想」にすぎない凶器としても機能している。こうしてヘミングウェイは、カラー・ラインに基づく職業上の差別待遇に対して、ポーターの間で集積しつつあった不満のマグマが噴き出し、社会秩序を危機に陥れる暴動に結び付く可能性のみならず、彼らの失望感や閉塞感もまた同時に浮き彫りにしたのである。

## 5. “The Porter” とプルマン・ポーター労働運動

ここまで分析してきたようなポーターたちが直面する過酷な現実と彼らの無力な抵抗の様子をつぶさに目撃した後、ジミーは再び列車からの車窓風景を眺めている。しかも今回は、物語当初とは対照的な天候となり、“rain”という語が13回(うち2回は過去進行形“was raining”、1回は動名詞“raining”、1回は動詞“rains”)も使用されている。そもそも自然風景の描写によって登場人物の心理的推移を記述する方法は、ヘミングウェイがよく用いる常套手段であるが、「ポーター」においても雨は『武器よさらば』(*A Farewell to Arms*, 1929)において描かれる雨と同様に、悲劇的な状況を表象する意味合いが付与されていると考えられる。ポーターたちが否応なく置かれた異質な現実世界との遭遇は、ジミーに少なからぬ衝撃を与えたと推測できるからである。その具体的な様子を検証してみたい。

洗面室を離れたジミーは、多くの乗客の誰にも興味を示さず、食堂車に戻ってポーターと料理長との会話を聞きたいと望んでいるように、もっぱら「黒人」鉄道従業員に関心を抱いている。とはいえ、彼らの世界からは

受け入れを拒絶されているかのように、ジミーはポーターの極めて丁寧な接客ぶりを目の当たりにするのみである（577）。その後、序章でも触れたように、彼は雨に濡れた風景がもたらした両義的な印象を説明し、次のようにも独白している。

そういったことすべてをそのとき考えていたのではないと思う。なぜならぼくはあれこれ考えるほうではなく、言葉にしてきちんと考えるたちでもないのだから。ハドソン川沿いの風景がぼくにさまざまな思いをもたらしたのだ。雨はすべての場所を、住み慣れた場所でさえ、奇妙なものに変えてしまう。（578）

奇しくもランドルフが1925年にBSCP結成に向けて最初の大規模集会を開いたのも、ハドソン川沿いに位置するハーレムの講堂においてであったが、ここでジミーは自らの精神的内面に変化をもたらした「黒人」ポーターが生きる世界を巡って、何らかの判断や立場を明確に表明してはいない。しかし彼が実際に目にした現実、対峙し続けることが困難であったと思われる。ジミー自身がポーターの世界を知らなかった過去へと時間を遡行し、見慣れた風景に囲まれたミシガンにおける父親との生活への回帰願望を抱いているからである（578）。このように見てくると、ジミーの車窓風景の独特な捉え方には、カラー・ラインの向こう側で新たな人種意識を体現したポーターおよび料理長との交流によって新鮮な興奮に包まれながらも、彼らが身を置く不条理な世界に精神的打撃を受けた彼の複雑な心理的内面が投影されていると考えられるだろう。

「ポーター」に描き出されるポーターには、微笑む「ジョージ」という白人アメリカ人が最も快適だと感じる柔順な労働者としての外向けの世界とは対照的なプルマン社には手の届かない見えない場所にあったポーターの精神世界（Hughes 27）を効果的に映し出すことに腐心した作者ヘミングウェイの創作姿勢が滲み出ている。こうして白人主流社会がポーターに投影した虚像と実像との乖離のみならず、ポーターが抱く深い憂愁の念を浮き彫りにした物語「ポーター」は、ランドルフが率いるBSCPの運動に抗して、依然としてポーターをステレオタイプの範疇に押しとどめることによって、現実を隠蔽しようと試みるプルマン社に対する告発ともなる。そ

の一方でこの物語においては、プルマン・ポーター労働運動を背景に、ジミーの「黒人」ポーターとの出会いとそれがもたらした衝撃を反芻する過程に彼の精神的成長への契機を見出すことができるだろう。

## 注

1. 本論で用いる「黒人」という語は、先祖の出自であるアフリカを用いたアメリカ系アメリカ人を指しているが、この語が肌の色による差別意識を内包してきたという背景を批判的なかたちで重視する視点から、あえて「 」付きで使用している。
2. ジョンソンは1910年7月4日に白人ボクサー、ジェームス・ジェフリーズ (James Jeffries) を倒してヘビー級チャンピオンの座に就いている。そもそもこの試合の背景には、チャンピオンだった白人ボクサーのトミー・バーンズ (Tommy Burns) が1908年にジョンソンとの闘いに敗れたため、アングロ・サクソンの男らしさを擁護し、突然姿を現した「黒人」を打ち負かすことで文明を救済して欲しいという白人によるジェフリーズに対する強い要請があった (Bederman 2)。それゆえ「黒人」が世界チャンピオンになるという紛れもない事実は、白人にとってまさに屈辱だった。しかもジョンソンは白人の前でも尊大で挑戦的な態度を取っていた (Boddy 186)。彼はニュー・ニグロの原型とも見なされている (Holcomb 146) が、1912年にマン法に違反したとして有罪宣告された後、保釈が認められるものの国内での試合を禁止され、国税庁が彼を破産者に追い込んでいる (小澤 287)。一方で「誇りと自信を持って」と「黒人」大衆に訴えかけたガーヴェイは、「黒人」独自の経済、社会、文化を構築する事業に取り掛かり、アメリカやカリブ海域などで史上かつてない数の「黒人」支持者を得ている。しかし彼の「黒人」至上主義はやがて極端になったほか、最終的に連邦捜査局によって詐欺罪で起訴され、1925年に投獄された後、27年には国外追放されている (上杉 78-80)。

## 参考文献

- Arnesen, Eric. *Brotherhoods of Color: Black Railroad Workers and the Struggle for Equality*. Cambridge: Harvard UP, 2002. Print.
- Bederman, Gail. *Manliness & Civilization: A Cultural History of Gender and Race in the United States, 1880-1917*. Chicago: U of Chicago P, 1996. Print.
- Boddy, Kasia. *Boxing: A Cultural History*. London: Reaktion, 2009. Print.
- Dudley, Marc Kevin. *Hemingway, Race, and Art: Bloodlines and the Color Line*. Kent: Kent State UP, 2012. Print.

- 藤永康政「プルマン・ポーターの公共圏—鉄道サービス労働者のコミュニティと『隠されたトランスクリプト』」『流動する<黒人>コミュニティ—アメリカ史を問う』樋口映美編（彩流社、2012年）116-43.
- 。「黒人思潮の変化と公民権連合の構築（1）—大恐慌とA・フィリップ・ランドルフの登場」Web. 17 Mar. 2015.
- Guterl, Matthew Pratt. *The Color of Race in America, 1900-1940*. Cambridge: Harvard UP, 2002. Print.
- Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner, 2003. Print.
- 。「The Porter.” *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway: The Finca Vigía Edition*. New York: Simon & Schuster, 1987. 571-78. Print.
- Holcomb, Gary Edward. “Hemingway and McKay, Race and Nation.” *Hemingway and the Black Renaissance*. Ed. Gary Edward Holcomb and Charles Scruggs. Columbus: Ohio State UP, 2012. 133-50. Print.
- Hughes, Lyn. *An Anthology of Respect: The Pullman Porters National Historic Registry of African-American Railroad Employees*. Chicago: Hughes Peterson, 2009. Print.
- 今村楯夫『ヘミングウェイ—喪失から辺境を求めて』（冬樹社、1982年）
- 小澤英二「スポーツにおける『人種』」『アメリカニズムと「人種』』川島正樹編（名古屋大学出版会、2005年）280-303.
- Pullman Company. “Car Service Rules of the Operating Department of Pullman’s Palace Car Company, Revised Sept. 1st ...” (1893) W. H. Pottinger. Web. 30 Mar. 2015.
- Santino, Jack. *Miles of Smiles, Years of Struggle: Stories of Black Pullman Porters*. Urbana: U of Illinois P, 1991. Print.
- Tye, Larry. *Rising from the Rails: Pullman Porters and the Making of the Black Middle Class*. New York: Henry, Holt, 2005. Print.
- 上杉 忍『アメリカ黒人の歴史—奴隷貿易からオバマ大統領まで』（中公新書、2013年）
- （旭川工業高等専門学校）  
honjo@asahikawa-nct.ac.jp